「あのときを忘れない」

平成３０年４月１３日（金）
文責　佐々木　律　夫

みなさん、こんにちは。山形中学校長の佐々木律夫です。よろしくお願いします。

３月下旬に大平優前校長先生とお話しをした時に、「あのときを忘れない」の話になりました。私も前任校では学校の一角を使い復興教育の一環として、気になった新聞記事等を掲示していたので、とてもいい取組だなと感じました。その後、４月２日に地区の挨拶回りを行いました。霜畑小学校に向かう時、大きな工事車両が走っていました。復旧に向けた作業を行っていましたが、川の様子を見て大変驚きました。午後は久慈市役所に向かいました。国道２８１号線は数カ所で片側通行の道路工事を行っていましたし、久慈川も同様に河川工事を行っていました。花巻から来た私にとって大きな衝撃を受けましたが、地元のみなさんは明るく私達を受け入れていただきました。ありがとうございます。

さて、私は平成９年～平成１４年まで大槌中学校（現大槌学園）に勤務していました。東日本大震災の時は花巻の湯口中学校に勤務していましたが、その年の５月に当時お世話になった方々に会いに、釜石・大槌に向かいました。下の写真は釜石の鵜住居の写真です。左は震災当時の鵜住居小学校です。右は当時の鵜住居小学校の跡地に建設されている、ラグビーワールドカップのスタジアムです。

東日本大震災から７年１ヶ月後の姿です。このスタジアムが被災地の復興のシンボルの一つとして、世界中のみなさんに見ていただき、感じていただければと思っています。

左上の写真は以前私が勤めていた大槌町の震災直後の様子です。右は７年１ヶ月後の大槌の町です。

私たちは東日本大震災から何を学んだのでしょうか。例えば、次のようなことでしょうか。

・最優先は身を守ること
・どうしたら生き抜くことができるかを考えること
・避難訓練や防災訓練に進んで参加し真剣に取り組むこと
・日頃から近所の人達とのつながりを深めておくこと
・非常時の際は事態に備えて家族で話し合いを行っておくこと
・「備えあれば憂いなし」
・大地震や大津波、台風など自然災害について学ぶこと
・みんなの力を（若い力）を地域で発揮すること
・家族・友達・地域の人々との連帯や絆を大切にすること
・情報収集が大切なこと
・文明の利器、原子力発電の光と影

おそらくこれ以外に、もっともっと多くのこと、もっともっと大事なことを学んだのだと思います。そして、あの時一番大きく変化したのは、私たち一人ひとりの心の中だと思います。そこから感じたことが、次のような言葉です。この思いをこれからもずっと、私たちの心の中に持ち続けなければなりません。

「あたりまえ」を「ありがとう」と言うのが感謝
「だから、なに？」を「おめでとう」と言うのが賞賛
「もう、ダメだ」を「これからだ」と言うのが希望
「なりたいな」を「なってやる」と言うのが決意
「もういいや」を「まだ待とう」と言うのが忍耐
「疲れた」を「頑張った」と言うのが努力

「あのときを忘れない」

平成３０年５月１１日（金）
文責　佐々木　律　夫

【天国と地獄の長い箸】と【東日本大震災】

体育祭まであと一週間となりました。生徒会執行部と３年生を中心に、本当によく頑張っていると思います。この調子で当日を迎えられるといいですね。

さて、昨日の全校朝会で「天国と地獄の長い箸」という話をしました。みなさんは覚えていますか。

天国と地獄は全く違う空間に存在しているように思いますが、実は天国も地獄も同じ場所、同じ環境のところにあります。一つだけ違っているのは、そこにいる人々の意識だけです。

「あなたからどうぞ」「いつもありがとう」という自分よりも相手を思いやる気持ちがあるかないかの違いで、その世界は１８０度違ってくることになります。

そこにいる人々が、**「天国意識」**をもつか**「地獄意識」**をもつかということになります。この**「天国意識」**がはっきりと行動に表れたのが東日本大震災でした。

ある校長先生に聞いた話です。その校長先生は震災当時釜石の中学校に勤務していました。震災直後は食べるものもない、海はすぐそばにあるのに飲み水がない等、大変な状況でした。校長先生はここでじっと待っていても食料がいつ来るか分からないと考え、自分の出身である花巻市に向かったそうです。スーパーに行ってみるとやはり食料を求める人達で長蛇の列でした。校長先生はそこに並んでいる人達に向かって大きな声でお願いをしたそうです。「私は釜石の中学校から来ました。現在私の勤務している中学校には避難してきた人達がたくさんいます。しかし、食料も飲み水もありません。ここにいるみなさんも困っていることはよく分かります。もしも協力していただける方がいれば食料をゆずっていただけないでしょうか。」すると、そこに並んでいた人達は自分が持っていた食料を快くゆずってくれたそうです。校長先生は涙を流しながら、何度も何度もお礼を言って、持てるだけの食料を積んで釜石に戻りました。お腹を空かせているであろう地域の人達や子ども達に少しでもいいから食べて欲しいと思い食料を渡しました。しかし、誰一人として手をつけませんでした。「私はいいからあなたが食べて」「僕はいいから小さい子に食べさせて」みんなそんな気持ちをもっていたのです。自分中心ではなく相手を思いやる気持ちが芽生えていたのです。今考えると、まさに**「天国意識」**にみんながなっていました。このことは、世界中のニュースにもなりました。パニックを起こさず、何時間も待たされても不満を言わず、きちんと並ぶ日本人の意識に世界中が驚きました。

さて、あれから７年２ヶ月が過ぎました。今みなさんは体育祭に向けて一生懸命に取り組んでいます。一つのものを成功させることは本当に大変なことです。体育祭を成功させるキーワードは**「天国意識」**かもしれませんね。リーダーに感謝し、隣の友達に感謝し、競ってくれる相手チームに感謝し、アドバイスしてくれる先生方に感謝し、毎日の食事の準備や洗濯をしてくれる家族に感謝する。

山中生５４名が**「天国意識」**をもった時、体育祭は大成功すると思います。

「あのときを忘れない」

平成３０年６月１３日（水）
文責　佐々木　律　夫

５月２５日（金）山形中学校では避難訓練が行われました。火災を想定した避難訓練でした。さて、私たちはどうして避難訓練を行うのでしょうか？

「釜石の奇跡」からふり返ってみましょう

平成２３年３月１１日午後２時４６分、東日本大震災が発生しました。校舎内にいた釜石東中学校の生徒は一斉に校庭に出ましたが、副校長先生が「（避難所へ）走れ！」「点呼など取らなくていいから！」と叫びました。そして若い先生が率先避難者となって生徒達と避難所へ走りました。避難所は７００m先の福祉施設で、避難先は避難訓練で全生徒に周知していました。

当初一部の生徒は走らず、校庭に整列しようとしましたが、先生方が「逃げろ」「走れ」と指示したため、全員が校門を出て避難所へと駆け出しました。

隣の鵜住居小学校は耐震補強工事が終わったばかりの鉄筋コンクリート造り３階建ての校舎でした。雪も降っていたため鵜住居小学校では３階に児童を集めようとしました。しかし、「津波が来るぞ！」と叫びながら走っていく中学生を見て、教職員は避難所行きをすぐに決断し、小学生も高台へ走り出しました。この時、鵜住居小学校には保護者数人が児童を引き取りに来ていました。先生方は児童を避難させたことを説明し、一緒に避難することを勧めましたが、１人は児童を連れて帰宅し津波の犠牲になってしまいました。

避難した小中学生約６００人は、標高１０mの福祉施設に到着しましたが、崖が崩れそうになっていたので、さらに４００m離れた標高３０mの介護施設へ小学生の手を引きながら避難をしました。この直後高さ２０mの津波が押し寄せ、最初に避難した福祉施設は水没しました。冷静な中学生の判断が多くの命を間一髪で見事に救う結果となりました。

群馬大学の片田敏孝教授の指導で津波からの「避難訓練」を８年間積み重ねてきたことが、生存率９９．８％という素晴らしい成果を挙げ、後に「釜石の奇跡」と呼ばれました。

しかし、片田教授はこれを奇跡ではないと言っています。そして、片田教授は釜石の中学生に**「君たちは守られる側ではなく、守る側だ。自分より弱い立場にある小学生や高齢者を連れて逃げるんだ」**と言い続けてきました。

みなさんも下記のような言葉を聞いたことがありませんか？

「訓練で出来ないことは、本番でも出来ない」「訓練は本番のように、本番は訓練のように」

間もなく中総体「練習で出来ないことは、試合でも出来ない」「練習は試合のように、試合は練習のように」などと先生やコーチに言われていませんか。そう考えると、訓練をすることはとても大切だということが分かると思います。そして知識を身につけておくことも大切なことです。「奇跡」はそう簡単に起こるものではありません。常に災害に備え、いろんなことを想定して訓練をしたからこそ、多くの命が助かったのだと思います。

避難訓練の時にみなさんに話した、右の「お　は　し　もち」を覚えていますか？災害はいつ・どこで・どんな災害が発生するのか分かりません。学校にいる時、自宅にいる時、登下校中・買い物に行っている時、一人の時、地震の時、台風の時、火災の時等、まずは「命を守る」ことが最優先です。その時に大切なことは適切な判断です。その訓練をするのが「避難訓練」ということです。避難訓練をすることで、より多くの命を守ることが出来ます。次回も**「訓練は本番のように、本番は訓練のように」**の気持ちで取り組みましょう。

「あのときを忘れない」

平成３０年７月１１日（水）
文責　佐々木　律　夫

平成最悪の被害「平成３０年７月豪雨」

台風７号が九州に接近した平成３０年７月３日以降、「数十年に一度」と言われるような豪雨に見舞われました。

７月１１日現在、死者は１５０人以上、また５０人以上の安否がまだ分かっていないという状況です。今回の災害では、気象庁が６日～８日にかけて、「数十年に一度」の重大な災害が予想される「大雨　特別警報」を１１府県に出していました。一つの災害で、大雨特別警報が４都道府県以上に出されたのは史上初めてということでした。このように、早めに避難するように呼びかけていましたが、被害は最悪の結果となりました。

東日本大震災大津波が発生した時にも「想定外」という言葉が飛び交いました。今回の「平成３０年７月豪雨」も治水の想定を上回る量の雨が降りました。

ここ数年、気象の変化で起こる災害が続いていますが、そのたびに「記録的」「観測史上最大」「数十年に一度」「これまでに経験したことがない」等のような表現が使われています。今回の豪雨においても、多くの地域で避難勧告が出されましたが、住民のみなさんは直ちに避難することができたのでしょうか？被害地域によって状況は様々です。すぐに避難できる状況の地域もあったかもしれません。あるいはすでに道路が冠水して身動きができない地域もあったかもしれません。一方でこれまでの自然災害に対して、こんな事がありました。Ａ市３０万人に避難命令が出されましたが実際に避難した人は１８０人ほどでした。私も似たような経験があります。陸前高田市で合宿をしていた時、夜の９時頃地震が発生しました。沿岸部に津波警報が発表されたため、当時の避難所であった市民体育館に避難をしました。私は「津波がここまで来ることはないだろう」と思っていましたから避難しなくてもいいかなと思いました。すると合宿先の責任者の方がきて「警報が発令されたので避難してください」と言われました。私は選手を車に乗せて市民体育館に向かいました。体育館に行ってみると私たちの他に、数名の方が避難してきました。冬だったので一人一人に毛布が配布されました。そして日付が変わる頃、津波警報は解除され、私たちは合宿先に戻りました。今考えてみると、どうして自分から率先して避難しなかったのかなと思います。今回はたまたま大きな津波が来なかっただけです。

私たちはあの東日本大震災から多くのことを学んだはずです。今ならば間違いなく、誰に言われなくても、自分から高台に避難するでしょう。しかし、時間の経過とともに、私たちの危機意識は少しずつ薄れてきているのかもしれません。心のどこかに「根拠のない大丈夫！」が住み着いているのかなと思います。

この通信を書く時に、今一度「３．１１」を様々な角度からふり返ってみるようにしています。釜石市の防災教育を担当していた大学の先生は言います。その先生は２００４年から釜石の小中学生の防災教育について取り組んできた先生です。当時、向こう３０年の間に地震・津波が起こる確立は宮城県沖で９９％、三陸沖では９０％と言われていたようです。そんな状況であるにも関わらず、「３．１１」以前は、津波警報が発表され避難勧告が発令されても「誰も逃げない」という状況だったといいます。だからこそ事前に備え、迅速に逃げられるように子ども達を教育してきたことが、釜石市内１４の小中学校約３０００人の子ども達の命を守ることにつながったのです。つまり、釜石の子ども達は最初から避難できる子ども達ではなかったということです。様々な学習や経験を積み重ねることによって「主体的避難」を身につけることができたということになります。そして、災害が来たらどうするか、ということを考えたのではなく、災害が来る前に何ができるか、ということを考えたということです。今回の「平成３０年７月豪雨」と「３．１１の釜石の子ども達」から私たちはまた学ぶことができました。

「あのときを忘れない」

平成３０年８月２２日（水）
文責　佐々木　律　夫

ボランティアを考える

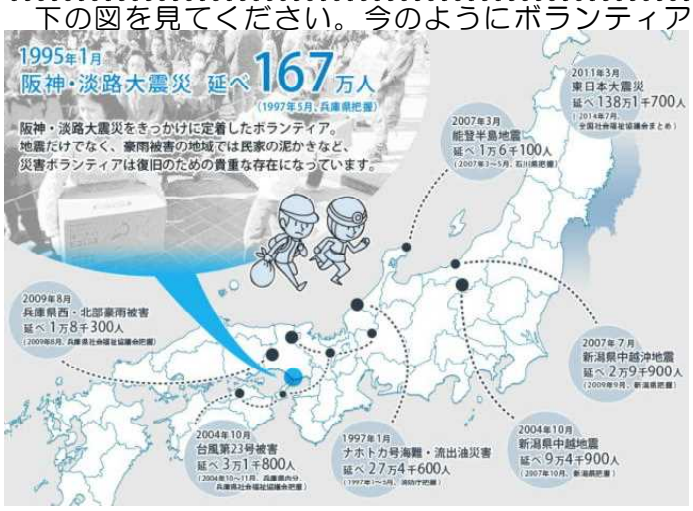
最近毎日のようにテレビに出てくる元気なおじいさんがいます。その人は、尾畠春夫さん（78）です。行方不明になった2歳の男の子を発見したボランティアの男性です。

みなさんも、「ボランティア」という言葉はよく耳にすると思いますし、８月１１日に行われた平庭高原での白樺植樹に参加したみなさんもボランティア活動に参加したということになります。

さて、ボランティアの定義、みなさんは分かりますか。調べてみるとこんなことが書いてありました。

ボランティアは個人の自発的な自由な意思によって行われる活動であって、人からの命令や強要されて行うものではありませんし、仕事でも、義務でもありません。自分がボランティア活動を「やろう！」「やりたい！」と思う気持ちが一番大事なことです。

下の図を見てください。今のようにボランティア活動が世の中に広く定着したのは、阪神淡路大震災の時でした。阪神淡路大震災前は、『ボランティア＝奉仕』と考えられていて、恵まれない気の毒な人のために行う奉仕・慈善活動という認識で「～してあげる」という感じが強かったと思います。ところが、現在のボランティア活動は、子供も高齢者も障害者も、ともに生き、ともに学び、ともに育ち、ともに暮らしていくために「何かをやりたい！」と思うことを自ら進んで行う活動になり、「自分のできることをして自分自身を向上させる」という考え方に変化してきました。



東日本大震災において、ボランティア活動に参加した人数の最新のデータ（平成３０年１月）では、１､５４５､６７７人にのぼっています。私たちの住む岩手県には５５５､６３５人のボランティアの方が参加したようですが、この数字はボランティアセンターの集計ですから、実際はもっと多いのかもしれません。

あの尾畠春夫さんはスーパーボランティアと呼ばれています。大切な思い出の写真を一枚一枚丁寧に拾い集めたり、家に入り込んだ泥上げをしたり、今回のように人捜しに出かけたり等様々な活動をしていますが、一番すごいなと思うのは、被災した方々に元気と勇希を与え続けているということです。そしてこんなことも言っていました。

・人の命より重いものはない。尊い命が助かってよかった
・人に、世の中に、恩返ししたい
・今の自分があるのは周囲のおかげ。社会に貢献したい
・６５歳まで鮮魚店で働いてきました。残りの人生、社会に貢献させてもらおうと思ってボランティア活動してきた
・「ボランティアは人を頼ったり、物をもらったりしちゃいけない」「自己完結、自己責任。怪我しても自己責任」
・Q.なぜ大分県からわざわざ？ A.わざわざじゃないですよ。日本人だから。
・ぼろぼろの救助袋について「まだ３８年しか使ってないから新しいですよ」
・日本っちゅう国は資源の無い国じゃから。だけど知恵が無限にあるんですよ

考え方がとても前向きで、ユーモアのある７８歳だなと思いました。もちろん私達は尾鼻さんのようにはできませんが、困っている人がいたらそっと手を差し伸べることはできるかもしれません。朝友達にあった時、元気のいい「おはよう！」のひと言も、気持ちのよい行動になると思います。ボランティアは、小さなことを毎日続けていくことから始まります。
「はじめの一歩」を踏み出すことが大切なんだと思いました。

「あのときを忘れない」

平成３０年９月１１日（火）
文責　佐々木　律　夫

２０１１年３月１１日の東日本大震災から７年６ヶ月の時間が流れました。

今回の「あのときを忘れない」は、これまでにも何度か「釜石の奇跡」について紹介してきましたが、その「釜石の奇跡」と呼ばれる児童生徒の行動がなぜ起きたのかをよく知る方に執筆をお願いしました。

今回の執筆を快く引き受けていただいた方は、現在、花巻市教育委員会に勤務している齋藤真先生です。齋藤真先生は、当時釜石東中学校に勤務していました。東日本大震災当時、何が起こったのか、そしてなぜ助かったのか、また普段どんな取り組みをしていたのかについて紹介していただきました。

齋藤真先生は今でも全国各地から招かれ、防災教育について講演しています。下記の記事は８月に高知市内で行われた講演会の様子です。（2018年9月1日付の毎日新聞の記事から）

「奇跡」普段の備えから　元釜石東中教諭、各地で講演　防災教育の大切さ訴え

毎日新聞2018年9月1日　東京夕刊

２０１１年３月の東日本大震災で、岩手県釜石市の小中学生は５人が犠牲になったが、学校にいた全員が無事だった。震災後、同市の防災教育に注目が集まった。市立釜石東中で当時、生徒と一緒に避難した教諭の齋藤真さん（４５）＝現・同県花巻市教委指導主事＝は今、全国各地に招かれ、防災教育の大切さを説き続けている。1日は「防災の日」。【堀江拓哉】

東日本大震災での岩手県釜石市立釜石東中の避難について話す齋藤真さん＝高知市内で２０１８年８月２日、堀江拓哉撮影

「生き残ることができた要因として言えるのは想定外に備えたこと」。高知市で８月に開かれた防災教育研修会で、齋藤さんは教員ら１７０人に語りかけた。

釜石東中は海から５００メートル。地域を襲った大津波は想定をはるかに超え、校舎３階の高さに達した。

地震時は、ほとんどの生徒が部活動の準備などで校内にいた。津波からそれぞれが身を守って逃げる「津波てんでんこ」の教えを守り、教員の指示を待たずに約７００メートル先の避難所に向けて走り出した。隣接する小学校の教職員や児童も、逃げる生徒の姿を見て避難を始めた。

避難所のグループホームの駐車場で生徒らが整列していると、齋藤さんは高齢の女性に声をかけられた。そばの崖崩れを示し、「生まれてからこの崖が崩れたのを見たことがない。ここにいたらみんな死んでしまうぞ」と言う。さらに高台にある介護施設に全員で避難することになり、中学生が小学生の手を引いて一緒に逃げた。

グループホームには、その後間もなく津波が押し寄せた。齋藤さんは「あの時避難していなかったら、私たちは津波に流されていた」と振り返る。

そして、当時「釜石の奇跡」と呼ばれた一連の避難について「いろいろな方の声や判断が行動に結びつき、それが奇跡と言われているのかもしれない」と総括。子供たちと震災について話し、防災教育につなげて欲しいと訴えた。

会場から「助かった学校とそうでなかった学校を分けたものは何だったか」と質問があった。齋藤さんは「はっきりとは分からない」と答えた上で、想定外への対応の大切さを説いた。

震災前の避難訓練で、生徒１人に階段で転んでけがをしたふりをさせる「仕掛け」をしたという。周りの生徒は小屋からリヤカーを出し、けが人役の生徒を乗せて避難した。

「『災害を生き抜いて欲しい』という思いを込め、基本の訓練とプラスアルファの仕掛けをしてほしい。想定以上のことがあった時に生きるはず」と呼びかけると、参加者らは大きくうなずいた。

「あのときを忘れない」

平成３０年９月１１日(火)
文責　　齋　藤　　真

【東日本大震災が起こった時の状況】

放課後の部活動に入ろうとしていた時間でした。部活の練習指導に向かうため職員玄関先で靴のひもを結んでいたところ、近くの山でドーンと大きな山鳴りがしたのです。地震の時は山鳴りがするのですが、ゴゴゴゴという音と共に今まで経験したことがない、大変な揺れがやってきました。鉄筋の校舎はぐにゃぐにゃに揺れ、倒れるのではないかと思うくらいで、私は立っていることができませんでした。

揺れが少し収まった後、急いで職員室に戻り、副校長に「全校避難するように放送をかけて下さい」といったのですが、停電で放送ができません。そこで、ハンドマイクを持って、「校舎の外に出ろ」と校舎内を走り回ったのですが、すれ違う生徒が少ないのです。「あれ」と思った時には、すでに生徒は皆校庭に出ていました。

誘導していた教員が「点呼はいいから、すぐに避難しろ」といったので、その人を先頭に、700 メートルほど上手で避難所になっている「グループホームございしょの里」まで走ったのです。いつやってくるか分からない、しかし確実に迫り押し寄せてくる波を背にして、10 分近くも走った生徒たちはどんな気持ちであったか、その心中は察しきれません。

ございしょの里で、生徒の避難状況を確認していたら、私の袖を引っ張るおばあさんがいるのです。「今までずっとここで生きてきたけれど、ございしょの里の脇の山の岩盤が崩れたのを見たことがなかった。それが崩れたのだから、とんでもないことが起こる。ここにいたら、死ぬぞ」と言うのです。確かに余震が続いていて、岩盤はがらがら崩れているので、おばあちゃんの言っていることを副校長に話したのです。副校長は一瞬考えて、「では、避難しましょう」と言いました。それから、釜石東中学校と隣接する鵜住居(うのすまい)小学校の生徒・児童及び教員 600 名以上、近隣の病院の患者、ございしょの里の入所者と職員など全部で 700 名以上が一斉に、やまざきデイサービスホームに逃げたのです。

やまざきデイサービスホームに着いて、整列点呼しながら、建物の裏手に回って、「津波が来るのかな」と逃げてきた方角を見ていたら、ゴゴンと大きな音がして、煙が上がったのです。「まずい、火事だ」と思ったら、北隣の大槌町との境に連なる山影を消すように、煙のような水しぶきをいくつもあげながら津波が押し寄せてきました。その波は私の目線より高かったので、「ああ、もうだめだ。これで死ぬんだな」と思ったら、今までの人生が走馬燈のように浮かんできました。

ふと我に返ると、周りの人たちは「死ぬぞ！逃げろ」と絶叫していました。私は腰が抜けてしまったような状態で自分の膝を拳で叩きながら、子どもたちと懸命に走りました。後ろから聞こえる津波の轟音と響き渡る悲鳴の中、さらに 200m ほど上の釜石方面と鵜住居方面に向かう国道 45 号線と合流する T 字路にある石材店の展示場まで逃げました。そこで、「ここまで、波は来ねえぞ」という大人の声がしたので、ふっと息をつきました。あたりを見回すと、避難した皆が道の真ん中であるにも関わらず座り込んでいます。さらには先に道はないものの、山が続いているので、その山まで登っている生徒もいました。

結局、津波はやまざきデイサービスホームの 5 メートルほど下で止まりました。少しずつ、生き延びたことを実感しました。しかし目の前には、道路にへたりこみうつむく人々、抱き合って泣きじゃくる生徒たち、唇をかみしめ虚空を見つめる大人たち。山の中からは悲鳴や絶叫が聞こえ、過呼吸やパニックになっている子どもたちを教員が抱きしめて、落ち着かせていました。阿鼻叫喚とはこのような状況のことを言うのでしょう。あの時、“命の際(きわ)”で、私たちはただその現実の中を必死で生きていました。

「あのときを忘れない」

平成３０年９月１１日(火)
文責　　齋 藤　　真

【なぜ逃げ切ることができたのか】

一番大きい理由は、圧倒的に海に近いことです。釜石東中学校は鵜住居川が大槌湾に合流するあたりにあり、校庭の向こう側は海です。そんな中で、釜石市の防災・危機管理アドバイザーを務める群馬大学の片田　敏孝教授からは「防災教育をどれだけやっても、やり過ぎはない」と言われ続けてきました。

また、生徒たちも目の前が海で、大津波警報が発令されれば、その直後に津波が自分たちに襲いかかってくることを理解しています。ですから、避難訓練の真剣さ度合いが違います。釜石東中学校の防災教育のきっかけは平成 18 年 1 月に行われた片田　敏孝教授の津波講演会で、全校の取り組みとして本格的にスタートしたのは平成 20 年でした。

地域のおじいちゃん、おばあちゃんに津波の話を聞きに行ったり、総合的な学習の時間に講師を招いて、1960 年のチリ地震津波の経験や 1933 年の昭和三陸津波、1896 年の明治三陸大津波の言い伝えなどを聞きました。そこで、「津波が来たら、“てんでんこ”だ。てんでんばらばらに逃げなければ、ダメだ」という先人から語り継がれた知恵を、自分たちの生活に生かそうということになったのです。

津波が来た時に、それぞれがてんでんばらばらに逃げるのであれば、極論すると、避難訓練は必要ないということになるかもしれません。しかし、それでは本当に逃げ切ることはできません。普段から訓練していて、逃げなくてはいけないという意識を強くもっているから、“てんでんこ”ができるのです。

3 月 11 日の 2 日前の 3 月 9 日、昼近くに震度 5 弱の地震がありました。今思えば、大震災の前触れだったのですが、試験監督をやっていて、ぐらっときたので、教室に閉じ込められないために、とっさに窓を開けたら、ほぼ同時に生徒全員が机の下に入っていました。本当にびっくりしました。私が指示を出す前です。「津波の心配はありません」という放送が流れた後、「お前たち、すごいな。避難訓練のたまものだな」といったのですが、教師に言われなくても、それぞれが“てんでんこ”に判断していたのです。

【普段どんな防災の取り組みをしていたか】

取り組んできたことはたくさんあるので、代表的なものをふたつ紹介します。ひとつは、『安否札』配布の取り組みです。『安否札』とは、地震や津波があって避難する際、玄関先に「避難しました」の札を掲げることによって、家に入って確認しなくてもその家庭の安否の状況が分かるという札です。まずはこれを地域に 1,000 枚配布しました。3 年間で 3,000 枚を配布しようと計画していました。実は、中学生が手渡しして歩くことで、地域の防災意識を高めようという大きなねらいもありました。

実は震災の時に、私の住んでいた家は津波で流されたのですが、私の家より上方の流されなかった家の玄関に、避難先の書いた安否札が下げられていたのです。「生徒たちの取り組みは生きていたのだ」と、思わず涙が出ました。

ふたつめは、避難訓練です。中学校単独の場合と鵜住居小学校と一緒にやる場合がありましたが、色々と試行錯誤をしてきました。例えばただ避難するだけではなく、訓練の中に様々なアクシデントを盛り込んで生徒が自分で考え判断して行動できるようにしていました。生徒には言わずに何人か抜いて、点呼時にいないようにして、どうすればいいのかを臨機応変で考えられるようにしました。また、わざとケガ人を作って、保健室に待機させました。そうしたら、普段は綱引きの綱を運んだり整備作業時に使うリヤカーを持ってきて、それに怪我人を乗せて避難しましたし、小学生や病気がちの生徒は背負って逃げました。私たち教師の予想を超える生徒の行動力には、正直いつも驚きと感動を覚えていました。

「あのときを忘れない」

平成３０年１０月１６日（火）
文責　佐々木　律　夫

台風２４号・２５号が2週続けて岩手県を通過しました。どちらの台風も私たちの生活に大きな被害をもたらしました。

今年は全国各地において自然災害が立て続けに発生しています。自然災害が発生したときに、よくニュースになるのが「防災」という言葉です。みなさんも聞いたことがあると思いますが、家庭でできるアイディアが紹介されているようなので、みなさんも参考にしてみてください。

【いつも食べているものでそなえる】
・食パンが安いときに購入し、冷凍保存。食パンはすぐに解凍でき、火を使わなくても食べられるので便利。

【停電にそなえて】
・家の中の動線に暗がりでも光る蛍光シールを数カ所貼っておくと動きやすい。

【地震にも安心な照明】
・停電した時に、ろうそくではなくガーデン用ソーラーライトそれもオン・オフの切り換えがあるものを使うと、地震の揺れにも安心。

【ライフライン２系統】
・水道と井戸、プロパンガスとカセットガスと炭、自動車とオートバイと自転車など。

【話すことができないときも】
・外出時の持ち物として。①自分の写真、②保険証コピー、③病院の診察券コピー、④既往症明細、⑤薬明細、⑥連絡先等を、家族でそれぞれ持っている。自分が話すことができない状態の対処法。

【寝る前にヤカンに水を汲む】
・寝る前にヤカンに水を汲んでおく。突然の断水や翌朝水道管が凍ったときの対処。

【石油ストーブ】
・電器やガス、水道が止まった中、石油ストーブがあれば調理ができる。

【介護用品の利用】
・体ふきシート、尿取りパットはビニール袋に入れて捨てられるので清潔。入浴できないときはドライシャンプーを利用。

【暮らしのあちこちに、防災の視点】
・①庭の納屋に防災グッズ一式を入れた箱を置いておく。中身は寝袋、飲料用水ペットボトル、カイロ、手袋、マッチ、ライト、タオル等。②ブルーシートと物干しスタンドでテントを作る。数十本の水を入れたペットボトルを準備。

【日頃から情報収集】
・図書館などで防災関連の本を読み、情報を収集するように心がける。

【日頃の準備】
・家族全員のキーホルダーに笛とミニ懐中電灯をつける。

【パジャマに見えないパジャマ】
・外に出ても普通に見えるパジャマを着て寝る。

【普段の生活に取り入れる】
・お風呂の水は、掃除をするまでは捨てない。火災、断水時に必要。水は常にポリタンクに保存して１週間毎に入れ替え、洗濯に利用。バッグに非常持ち出し用に必要なものを入れて保管する。取引銀行と口座番号を控えておく。冷凍食品をいっぱいにして順に使い回す。

【家族会議をする】
・災害はいつ起こるか分かりません。家族会議で避難場所の確認。がけ等の危険箇所のチェック、非常時の連絡方法などを確認しておく。

災害発生時に自分を支えてくれるのは、知識と技術と備えです。過去の災害から学んだ教訓を大切にしましょう。そして、家族を思う気持ちを大切にし行動したいものです。

「あのときを忘れない」

平成３０年１１月１２日（月）
文責　佐々木　律　夫

東日本大震災から７年８ヶ月が過ぎました。９月に行われた講演会では、佐藤健さんにお話しを伺いました。その後、みなさんの感想を読みましたが、多くの生徒が東日本大震災についてあまり覚えていないと書いていました。だからこそ、私たちはあの当時を振り返り、教訓にしながら次の世代に伝えるという使命をもっているのだと思います。

さて、東日本大震災の被害を受けて話題になったことがあります。それは原子力発電所の事故により、福島県の児童・生徒が転校先で「いじめ」を受けたり、風評被害にあって苦しんでいるということです。その例を２つ紹介します。

「あのひとことで」

地震の後、外での運動を禁止されていた僕たちは、しばらく休みだったサッカーの練習が始まると聞いて、とびあがって喜んだ。久しぶりに会う友達とのあいさつもそこそこに、ボールを蹴り始めた。久しぶりの校庭で、僕たちは夢中になってボールを蹴った。「やっぱり、外で運動できるのは楽しいし、気持ちいい。」そう思いながら練習しているうちに、コーチから集合の声がかかった。コーチは３週間後に、隣の県のチームと練習試合が決まったことを、僕たちに伝え、「張り切りすぎてけがをしないように」と話しを締めくくった。

練習からの帰り、僕たちは練習試合の話しで盛り上がった。地震以来、外での運動が制限され、家族も忙しくて、なかなか遠出することもなかったからだ。その日から練習試合の日が来ることが、とても楽しみで、これまで以上に練習に力が入った。みんな、久しぶりの試合に勝ちたいという気持ちでいっぱいだった。

３週間後、僕たちはバスに乗って練習試合会場に向かった。グラウンドですでに練習を始めているチームもいて、さっそく、アップとドリル練習を始めたときだった。友達のパスが大きくそれ、相手チームの方に転がって行ってしまった。ぼくは「すみません！」と大きな声を出しながらボールの方へ走っていった。転がっていったボールは、相手チームの一人に当たり、もう一度「すみませんでした」と言ってボールを拾おうとした。その時「お前たち、福島だろ。放射能がうつるからさわんなよ。」とつぶやいたのが聞こえた。

僕は、頭の中が真っ白になって、自分達のベンチに戻った。それまでのうきうきした気持ちは消え、試合に勝っても気持ちは晴れないままだった。

【中学生・高校生のための放射線副読本】

「（加害児童生徒の）３人から、お金を持ってこいと言われた」
「〇〇〇（加害児童生徒名）からはメールでも言われた」
「人目がきにならないとこで、もってこいと言われた」
「お金持ってこいと言われた時、すごい、いらいらとくやしさがあったけど、抵抗するとまたいじめが始まると思って、何もできずにただ怖くてしょうがなかった」
「ばいしょう金あるだろと言われ、むかつくし、抵抗できなかったのもくやしい」
「〇〇〇（加害児童生徒名）、〇〇（加害児童生徒名）には、いつも蹴られたり、殴られたり、ランドセルふりまわされる。階段では押されたりして、いつもどこで終わるかわかんなかったので怖かった。」
「ばい菌扱いされて、放射能だと思って、いつもつらかった。福島の人は、いじめられると思った。何も抵抗できなかった」
「いままで、いろんな話しをしてきたけど（学校は）信用してくれなかった」
「何回も先生に言おうとすると、無視されてた」

【横浜に転校した児童の手記】

上の写真は福島県の東側を通る、常磐道（高速道路）広野～南相馬間に設置されている放射線量を示す表示盤です。

「あのときを忘れない」

平成３０年１２月１１日（火）
文責　佐々木　律　夫

平成３０年も残りわずかとなりました。最近は「平成最後の〇〇」という言葉をよく耳にします。平成２３年３月１１日に発生した東日本大震災から７年９ヶ月です。来年５月から元号が変わります。平成から何という元号に変わるのかとても楽しみですが、一方で平成の時代に起こった自然災害が忘れられるのではないかと心配しています。みなさんがあまり覚えていないと言っていた東日本大震災について、もう一度数字を見ながら、ちょっと振り返ってみましょう。

（消防庁災害対策本部が平成３０年９月７日に発表した報告書から）

①発生日時　　平成２３年３月１１日　１４時４６分
②震央地名　　三陸沖（北緯３８．１度　東経１４２．９度）
③震源の深さ　２４ｋｍ
④規模　　モーメントマグニチュード９．０
⑤各地の震度　震度７宮城県：栗原市（ここが最大でした）
　　震度６弱岩手県：大船渡市、釜石市、滝沢村、矢巾町、花巻市、一関市、奥州市、藤沢町（岩手県内震度６弱以上の市町村です）久慈市は震度５弱でした。
⑥津波　　３月１１日１４時４９分　津波警報（大津波）発表
⑦余震　　震度６強→２回　６弱→３回　５強→１７回　５弱→５１回　４→３１０回
⑧人的被害（平成３０年９月１日現在）
　　死者　１９,６６７人（久慈市は４人）
　　行方不明者　２,５６６人（久慈市は２人）
　　負傷者　６,２３１人（久慈市は１０人）
⑨住家被害（平成３０年９月１日現在）
　　全壊　１２１,７８３棟（久慈市は６５棟）
　　半壊　２８０,９６５棟（久慈市は２１２棟）
　　一部破損　７４５,１６２棟（久慈市は２９１棟）
　　公共建物被害　１４,５２７棟
　　その他　９２,０１２棟
　　※久慈市の非住家における全壊→２９０棟、半壊→２８７棟、一部損壊→１０３棟

どの数字を見ても、ただただ驚くばかりで、想像できない数字です。だからこそ災害に備えることは大切ですね。さて、みなさんは下の問題にいくつ答えられますか？

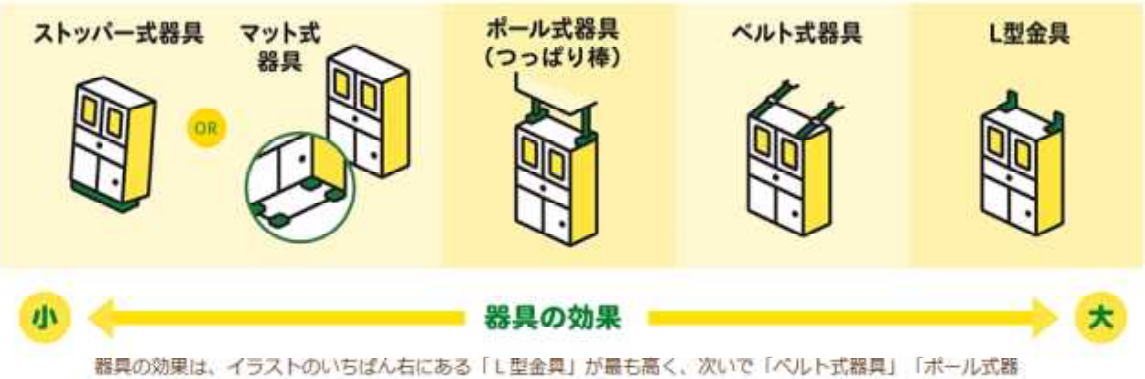
Ｑ１震災時の水の備え、家族４人だと３日分で何リットル必要でしょうか？
　Ａ　２４リットル　　Ｂ　３６リットル
Ｑ２大雨による洪水で避難するときに、適している靴の種類は？
　Ａ　ひも靴タイプのスニーカー　　Ｂ　ゴム製の長靴
Ｑ３屋外で竜巻に遭遇したら？
　Ａ　竜巻の進路を避けて逃げられるよう、見通しの良い場所で竜巻の様子を見つつ逆方向に逃げる
　Ｂ　すみやかに物陰や建物の中に避難し、身を小さくして飛散物を避けるよう頭を守る
Ｑ４車に乗っている際に洪水に襲われたとき、避難した方がよい目安は？
　Ａ　地面から水面の高さが５０センチから７０センチ
　Ｂ　地面から水面の高さが３０センチから５０センチ
Ｑ５外出先で火災にあったときは？
　Ａ　姿勢をできるだけ低くして、煙を吸わないようにする
　Ｂ　煙に巻き込まれることを防ぐため、防火扉を開けて空気の流れる道を作る
Ｑ６天ぷら油に火が燃え移ったとき、消火器がない場合の正しい対処法は？
　Ａ　シーツやバスタオルを濡らし、しぼったものを鍋にかぶせる
　Ｂ　何とか鍋が持てそうだったらシンクに移動させ、一気に水をかけ消火する
Ｑ７大きな地震が来たときにまずすることは？
　Ａ　大きな家具や窓から離れて、机の下などに隠れて身を守る
　Ｂ　火災を防ぐため、火の始末を確かめる
Ｑ８周りに建物がないところで雷が鳴り出した際、より安全な避難場所は？
　Ａ　木のそば
　Ｂ　車の中
Ｑ９非常用の持ち出し袋に入れておきたい食料は？
　Ａ　食べると暖もとれるカップラーメン
　Ｂ　水を入れたら食べられるフルファ米や飴やチョコレート
Ｑ１０避難所に行く際には必ずブレーカーを落とす
　Ａ　ＹＥＳ　　Ｂ　ＮＯ

※答えは裏面へ

Ｑ１→Ｂ　３６リットル
　一人一日３リットルの飲料水が必要と言われています。飲み水以外にも断水でトイレ、風呂、洗濯などに困ります。手拭きようにウエットテイッシュがあると便利です。
Ｑ２→Ａ　ひも靴タイプのスニーカー
　雨の日は水が入らなくて快適な長靴も、冠水した道路を歩く場合は水が入って重くなり、歩きづらく脱げてしまう可能性もあります。ひもでしっかり締められるスニーカーがいいでしょう。
Ｑ３→Ｂ　すみやかに物陰や建物の中に避難し、身を小さくして飛散物を避けるよう頭を守る
　竜巻は自動車並みのスピードで進むこともあるため、できればコンクリート製の丈夫な建物に避難しましょう。その際、飛散物で窓が割れる可能性があるので窓から離れましょう。
Ｑ４→Ｂ　地面から水面の高さが３０センチから５０センチ
　浸水の深さが地上から５０センチを超えると、車が浮き、ドアが開かずそのまま流されてしまう可能性があり危険です。車種によっては２０センチでも危ない車もあります。また、ドアの半分くらいまで水が来るとドアも開かなくなります。早いタイミングでの避難を考えましょう。
Ｑ５→Ａ　姿勢をできるだけ低くして、煙を吸わないようにする
　火災時に一番危険なのは煙です。有害なガスが含まれています。煙は上昇するため、低い姿勢でハンカチなどで口を覆い、煙を吸わないように、ただちに屋外や下の階に逃げましょう。防火扉は延焼を防ぐため、火災の際には閉まるようになっています。防火扉のまわりに物を置かないようにしましょう。
Ｑ６→Ａ　シーツやバスタオルを濡らし、しぼったものを鍋にかぶせる
　高温の油に水をかけると炎が急激に拡大して逆に危険ですので絶対に水をかけないようにしましょう。濡れシーツなどをかぶせ空気を遮断して火を消す方法が有効です。火を消したならばガスの元栓も閉めましょう。
Ｑ７→Ａ　大きな家具や窓から離れて、机の下などに隠れて身を守る
　震度６以上の揺れを感じると、ガスのマイコンメーターが自動的にガスを止めます。まずは身の安全の確保を優先します。身を守るポイントは、モノが「落ちてこない・倒れてこない・移動してこない」場所へ避難することです。また、エレベーターに乗っているときは全ての階のボタンを押して一番近くの階で降りて階段で避難しましょう。
Ｑ８→Ｂ　車の中
　雷は高いところ、そして電気を通しやすいものに落ちます。木のそばに立っていると、木に落ちた雷の電気が木の中を伝わって木のそばにいる人に流れてしまう場合があるので木の近くは危険です。安全な場所がない場合は、身をかがめて姿勢を低くしましょう。
Ｑ９→Ｂ　水を入れたら食べられるフルファ米や飴やチョコレート
　断水してガスが止まっているときにはお湯が沸かせないので、カップラーメンは調理できないことがあります。持ち出し袋に入れるには賞味期限が長く、腹持ちがよく、カロリーが高い、かさばらないものがお勧めです。ただ避難所では食料や飲料は比較的手に入りやすいので、持ち出し袋には避難所で手に入りにくいものや個人で必要なものを入れておくようにしましょう。
Ｑ１０→Ａ　ＹＥＳ
　災害時に停電していても、避難中に復旧して通電火災を起こすことがあります。停電していなくても避難中の漏電火災を防ぐため、避難所に行く際はブレーカーを落とすことを忘れないようにしましょう。

家具転倒がもたらす危険

　１９９５年に起きた阪神・淡路大震災では住宅内部での被害が多く、負傷者の４６％は「家具の転倒、落下」が原因でした。また、ガラスの飛散によって負傷した人が２９％ですので、７５％の人は家具やガラスの飛散が原因でけがをしたことになります。みなさんの家では家具をきちんと固定していますか。下の図を参考にするのもよいと思います。



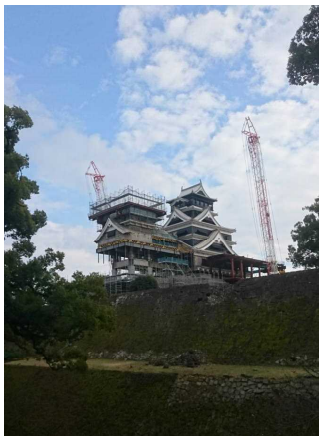
器具の効果は、イラストのいちばん右にある「Ｌ型金具」が最も高く、次いで「ベルト式器具」「ポール式器具」、「マット式・ストッパー式」の順番になります。

「あのときを忘れない」

平成３１年１月１６日（水）
文責　佐々木　律　夫

みなさん２０１９年がスタートしました。２０１８年の「あのときを忘れない」では東日本大震災を振り返ったり、全国各地で起こった自然災害に関する話題などを掲載してきました。

２０１８年は本当にたくさんの自然災害が発生しました。私も調べてみたのですが、災害発生数に本当に驚きました。２０１８年に発生した主な自然災害は下記の通りです。（地震は震度５以上）



平成二十八年四月に発生した熊本地震で、被害にあった熊本城は今も懸命な復旧工事が行われています

１月→各地で寒波
１月→群馬県　本白根山噴火
３月→西表島付近地震（震度５弱）
３月→鹿児島県　霧島山（新燃岳）噴火
４月→島根西部地震（震度５強）
４月→大分県　土砂崩れ
４月→北海道根室沖地震（震度５弱）
４月→鹿児島県　霧島山（えびの高原付近）噴火
５月→長野北部地震（震度５強）
６月→群馬南部地震（震度５弱）
６月→大阪北部地震（震度６弱）
７月→西日本豪雨災害　堤防決壊による浸水被害多数
７月→千葉県東方沖地震（震度５弱）
７月→連日４０度越の酷暑　最高気温４１．１度、記録更新、各地で熱中症多数
７月→迷走台風１２号　東から西へ日本横断
８月→台風２０号被害
９月→台風２１号被害　阪神直撃し関西空港水没
９月→北海道胆振東部地震（震度７）
９月→台風２４号被害　中部では１１９万戸の大規模停電発生
１０月→北海道胆振東部地震余震（震度５弱）
１１月→北海道で記録的に遅い初雪。遅い初雪としては１２８年ぶり
１２月→師走で夏日。九州や大阪で２５度越の異常気象
１２月→口永良部島　噴火

どうしてこんなに日本は自然災害が多いのでしょうか。

まずは地震ですが、日本列島は４枚のプレートの境界に位置していることは聞いたことがあると思います。ある統計で日本は、世界で地震が多い国第４位で、世界で発生する地震の約１０％は日本で起きていると言われています。更にマグニチュード６を超える地震に絞ると２０％が日本で発生していると言われています。

次に火山です。世界には約１５００ほどの活火山が存在しています。そのうち日本には１１１の活火山があります。世界的に見ても有数の火山大国です。

みなさんも知っている通り、津波発生の大半は地震によるものです。地震が多い日本は必然的に津波も多くなるということです。

台風です。夏から秋にかけてが台風の季節です。台風は熱帯や亜熱帯の暖かい海から生まれます。夏は日本近海の気圧の関係で日本に台風が流れるような道が出来てしまいます。また地球の温暖化も影響していますから、このまま温暖化が続けば台風が増加し続ける可能性があります。

豪雪です。降雪量の多い都市ランキング上位に日本は必ずランクインしています。最新のランキングでは１位青森市、２位旭川市、３位札幌市、４位山形市、５位富山市、６位秋田市となっています。これは世界のランキングです。

土砂災害です。土砂災害の多い理由として、雨が多いこと、急流の川が多いこと、もろい地質の山が多いことが関係しています。日本は世界平均の２倍の降水量といわれていますから、土砂災害には警戒しなければなりません。

さて、このように日本は世界的に見ても、自然災害に見舞われる可能性の高い国です。国連大学が発表した「世界リスク報告書２０１６版」で、日本は地震などの自然災害に見舞われる可能性では、世界１７１カ国中４位という高位ですが、「世界リスク評価」になると１７位になるようです。つまり日本は自然災害を想定したインフラ整備や対処能力、適応能力が評価されているため、総合評価ではランクが下がるということです。自然災害に見舞われることはとても怖いことですが、被害を最小限に食い止めるための手立てを考えることはとても大切なことです。もちろん大きな対策は国や県、市町村で対応しますが、自分の「命」を守るのは自分自身です。私たちは様々な災害からそのことを学んできました。それはここ山形町でも同じことです。

「あのときを忘れない」

平成３１年２月１２日（火）
文責　佐々木　律　夫

【俺たちにやらせてくれないか】

東日本大震災は、「1000年に一度」とか「かつてない」とか「未曾有の」等と表現をされました。地震・津波・火災が一度にやってきた自然災害です。しかも「大地震」「大津波」「大火災」ですから、その被害は甚大でした。そしてもう一つ忘れてならないことは、福島第一原発の事故です。

先日、元東京消防庁警防部長の佐藤康雄さんの記事を目にしました。佐藤さんは福島第一原発の事故当時、現場に入り総隊長として「放水冷却作戦」に臨み、被害の拡大を防いだ方です。その時の様子が記事になっていました。

福島第一原発には６機の原子炉がありますが、そのうち１号機から４号機までが爆発をしました。原因は電源喪失により冷却装置が働かなくなったことで、原子炉内の水が不足し爆発を起こしたのです。原子力災害は国家機密であるため、何かが起こったときは国が対応することになっています。事故当初は自衛隊のヘリ２機が空中から水をかけようとしましたが、非常に高い放射能で目的は達せられませんでした。警察も放水車で放水しようと思いましたが、放水のプロではありませんから難しかったのです。

この時佐藤さんたち東京消防庁は、依頼がくる可能性があったので、どのように対処するかの研究を既に始めていました。原発対応は任務には入っていませんでしたが、放射能を使ったテロや研究所で放射能が漏れたことを想定して、日々訓練を重ねていたのです。佐藤さんはハイパーレスキュー隊の隊長を集め、お願いをしました。「レスキュー隊をたくさん集めるから、ハイパーレスキュー隊の隊員は、集まった人達に操作の仕方を教える先生役をやってくれ」と言ったのです。各隊長から返ってきた言葉は「俺たちにやらせてくれ」「俺たちが行く、この日のために訓練しチームワークが出来ているんだ」と隊長たちは言ったそうです。

みなさんよく考えてみてください、あの現場に行くということは、もしかすると「二度と家族のところには戻れない」ということも覚悟しなければならないということです。実際に現場では「若いお前たちには未来がある、だからベテランの俺たちが行く」「若い私たちには家族はいません、みなさんには奥さんや子ども達がいるじゃないですか、私たちは失うものがないから私たちが行きます」こんなやりとりがありました。

その日の深夜０時５０分、内閣総理大臣から要請がきました。深夜２時に集合し８時には福島に到着しました。まずは現場の状況を確認しなければなりません。１７時から作業を開始する予定でした。予定では７分くらいで完了すると読んでいましたが、予定時間を大幅に超えても連絡が入りません。原発は人里離れたところに作るため、携帯がつながらない、消防無線もつながらない、衛生無線もつながらないという状況でした。１９時過ぎに隊員は戻ってきました。様子を聞くと、現場は思っていた以上に荒れていて、どのようにホースを伸ばせるかを調べていたため時間がかかったと言うことでした。その結果ホースを８００m伸ばさなければならないことが分かりました。しかも車で入れる場所は限られています。がれきやタンクなどが邪魔になり手で伸ばしていくしかありません。このホースは直径が１５０mmで１本の長さが５０m、重さは１００ｋｇあるホースです。これを７本、手でつながなければなりません。また、隊員は２５ｋｇの装備を背負っての作業です。しかも放射能の値が非常に高いために長時間の作業は出来ません。そんな困難な作戦なのですが、この作戦に「やらない」という選択肢はないのです。時間が経過すれば放射能の値はどんどん高くなっていくからです。

夜中の２３時、作戦は決行されました。このホースを使えば１分間に38,000㍑放水できるのです。深夜０時３０分放水が始まりました。水が出たとき隊員たちは全員カッツポーズをしていました。この厳しい任務をやり遂げたのです。

なぜこのような死を覚悟しなければならないような現場で任務を遂行できたのでしょうか。隊員の方はこう言っています。「こういう装備があるから」「訓練もしっかりやっているから」「情報をお互いに共有できたから」と話していますが、消防官が命をかけて現場に行ける勇気というのはそれだけではなく、家族の「愛」があるからだと言っています。佐藤さんは福島に出発する前に、奥さんにこれから行ってくることを伝えました。奥さんからは「日本の救世主になって」というメールが返ってきました。最前線で活躍したミシマ・ケイさんは正直「これはやばいな、どうしようかな」という恐怖感と誰もやったことのないミッションだから「絶対やってやる、俺らがやるんだ」という使命感が入り交じっていたと言っています。そんな中、ミシマ・ケイさんは福島に出発する時、奥さんにはとてもじゃないが電話は出来なかったと言っています。ですから奥さんには「ちょっと総理大臣から命令が出ちゃったから行ってくるよ」とメールをしました。すると奥さんからは「国のためなんだから、いっちょやってこい」という返事が返ってきたそうです。

佐藤さんは言います。「半分は家族の元に戻れないだろう」と覚悟し「責任を取るために私は行きました」と。結果的に家族の元に帰してやることが出来て本当に良かったと言っています。

今回の東日本大震災では、日本全国から緊急消防援助隊が27,000部隊以上、10万人以上の緊急援助隊が東北の被災地に駆けつけました。そして、世界各国から197の国と地域、機関から支援の申し入れがありました。

今まで文明がもたらした最大の発展は人間の「絆」だと佐藤さんは言っています。これまでにも多くの災害を人間は乗り越えてきた。その原動力は「絆」であり、この気持ちさえあれば、必ずや立ち直れると思う、だからみんなで頑張りましょうと結んでいます。

また、最前線で活躍したミシマ・ケイさんは「自分の命を守れない人間に他人を助けることは絶対にできない」隊長からそう教わっている。しかし「目の前に私たちの助けを求める人がいるのであれば、それは全力で本当に自分の力の限界を超えてまでも助けて、その人が私と同じように生きて帰れて良かったと思っていただけるように、これからも全力で頑張ります」と話しています。

みなさん、このお話を聞いてどんなことを感じたでしょうか。まさに命がけの任務です。しかし誰かがやらなければならないことでもありました。話の途中にもありましたが、困難な任務ではあるが「やらない」という選択肢はない、極限状態の中で行われた今回の作戦です。

実は私の教え子も消防に勤めていました。その日は休みだったようですが、突然の大きな揺れに彼は自宅から水門を閉めるために海側に向かいました。残念なことに、その後大津波の被害に遭ってしまいました。どんな気持ちで彼は水門を閉めに行ったのだろうか。おそらく住民は山に向かって移動したはずです。でも彼は海に向かって行ったのです。

福島第一原発で任務にあたった人も、岩手で水門を閉めに向かった人も、一人でも多くの命を守るという強い使命感をもって現場に向かっています。私たちはそんな人達に助けられながら、今を生きているのです。そんな私たちに出来ることは何なのかを、これからも自分自身に問い続けなければならないし、決して忘れてはなりません。

１年生は三陸鉄道に乗りながら当時の状況をたくさん学んできました。そして全校集会で立派に発表をしてくれました。決して忘れられない体験学習でした。

２年生は職場体験学習を２日間行うことが出来ました。働くことの大変さと同時に楽しさも学ぶことが出来ました。どの職場でも必ず誰かに助けてもらい、声をかけてもらったはずです。一人では生きていけないことを学びました。

３年生は最上級生として先頭に立つことの難しさとやりがいを学びました。そして、みんなで取り組むことの素晴らしさを一番感じました。また東京に行って自分の世界を広げることが出来ました。もう少しすると、自分で選んだ道を歩み始めます。

山中生５４名が生きることに関して何かを掴んだこの１年でした。

「あのときを忘れない」

平成３１年３月１１日（月）
文責　佐々木　律　夫

平成２３年３月１１日は金曜日でした。あの日から８年になりました。３年生は小学校１年生でしたし、１、２年生は小学校入学前ですから、当時のことはあまり覚えていないかもしれません。

今日の６時間目に行った全校集会で、副校長先生にお話しをしてもらいました。皆さんはどんなことを感じたのでしょうか。

さて、今回の「あのときを忘れない」は岩手大学に勤務している森本晋也先生にお願いをして、資料を作っていただきました。お忙しいなか、皆さんのために役立てていただければということで、快く引き受けていただきました。森本先生は下の資料にもある通り、東日本大震災の前年度まで釜石東中学校に勤務していました。

今回の資料は、当時の釜石東中学校の生徒が、防災の学習を通して「感じたこと」「学んだこと」が紹介されています。また、自分達が地域のためにやってみたこと、理科の授業で地震のメカニズムについて学んでいたことで、「津波がくる」と思い避難したことなども紹介されています。避難訓練を繰り返していたことで頭の中はパニックになっていても、自然と体が動いたことなど、私たちにも役に立つことがたくさんあります。

「学ぶ」ということは、自分の命を守ることにつながっています。「地域にかかわる」ということは、多くの命を救うことにつながっています。これからの私たちは、いざというときのために「備え」ておかなければなりません。そして、この８年から私たちは「生きる」ことを学び、次の世代に「伝え」なければならない使命があります。今日もみんなで学びましょう。

震災を生き抜いた子どもたちに学ぶ日頃の備え

～釜石東中学校の生徒たちの言葉から～

岩手大学
森本　晋也

私は、岩手大学の森本と申します。東日本大震災の前年度まで、釜石東中学校に勤務して防災教育を担当していました。佐々木律夫校長先生には、私が初めて勤めた千厩中学校でとてもお世話になりました。

さて、佐々木校長先生の校長だよりの中で、齋藤真先生のお話しや、釜石市の防災教育の紹介がありました。私は、震災を生き抜いた当時の釜石東中学校の生徒たちに、防災の学習や取組でどんなことが大事なのかインタビュー調査を行っています。その調査から、大切だなと思うことを紹介させていただきます。

1、災害は自分ごとだ！

「津波の危険は、自分にくるかもしれない。」「グループでマップを見ながら津波が来たらどうすると考え、人ごとではないと思った。」「地震・津波の知識を知って危機感を感じた。」など、震災前に、当時の生徒たちは、災害や防災を他人事ではなく、自分ごととして考え、課題意識を持って防災の学習や避難訓練に参加していました。

2、自分で学習した！

「自分たちでやると考えるので印象に残っている。」「自分たちで調べて書くことで記憶に残っている。」など、自分たちで調べたり、考えたりしたことがとても重要だったと元生徒たちはいいます。

3、みんなの命が助かるために！

「『てんでんこ』の教えを家族と話し合った。」「地域の人を巻き込んだことで、地域の人と挨拶やつながりができた。」「地域の防災意識の高まりに関わることができた。」ある生徒は、みんなの命が助かるためにはどうすればいいかと考えて防災の活動を行っていたといいます。

4、繰り返しやる！体が覚えている。

「避難訓練を繰り返しやったことで、意識が高まった。」ある生徒は、大きな揺れで頭は真っ白になった。でも体は覚えていて、体が動き出し避難できた。だから避難訓練は大事といいます。

5　地域のためにやってよかった！

「地域の人たちに安否札を配っていたら、いいことやっているねと言われてうれしかった。」「自分から地域の人に挨拶できるようになった。」「真剣に取り組んで達成感をもった。」など、地域の人に声をかけられてうれしかった。防災の学習や活動に取り組んでいてよかったといいます。

次に、インタビュー調査で、中学校の時の学習で印象に残っていることと、その理由、これからの防災教育で大切だと思うことなどについて話してもらったことを紹介します。

Ａさんは、フィールドワーク（地域の津波の歴史を地域で調べたこと）が印象に残っている理由を次のように話しました。「フィールドワークで、自分の目で見て、自分で歩いて、ここまで津波が来たらどうなると思った。ただ話を聞くのではなく、被害のあった土地で話を聞くと想像できる。先生が言うよりは、中学生ながら重みのある言葉だと思っていた。被害の大きさ、人口の何割も亡くなった。調べたことを覚えている。本でも調べて、文化祭でポスター発表もした。防災ボランティーストの活動のまとめも行った。学習経験がつながった。親もそれを見たと言われ、地域の人にも発信する文化祭だったので印象に残っている」そして、彼はこれからの防災教育で大切な学習として、「自分の意見を持つ学習。自分で考える。教わって学習するのでは無く、調べて、考えることで、実際に経験していないことでも、こういうときどうすればいいかを考え、経験則になる。例えば内陸部でも、調べて、考えて、発信することで、防災だけでなく、応用になる。ボランティアに行く前に今、何が必要なのかを考えることができる」といいます。

Ｂさんは、「フィールドワークに参加した友達から、両石地区で、家族を見に行ったら一緒に流されたということ、『てんでんこ』という言葉、家族が家にいても津波の心配があるときは戻らないという話を聞きました。何で戻ったらいけないんだろうと思い、深く考えて、戻ってはいけない理由は、一人一人が自分の命を守るためで、自分たち一人一人が逃げれば、家族も自ずと逃げて再会できると友達と考えたそうです。自分たち自身で考える機会があったからこそ、身に付いていたといいます。

父母にこのことを話して、家族で避難経路も見たそうです。そして、「もし私が学校にいるときに津波警報が出たら、お願いだからお父さんは、お父さんで逃げてね。お母さんはお母さんで逃げてねとお願いした。決して私を迎えに来ないでね」と話したそうです。震災の時、お父さんも会社から戻ろうと思ったが、娘の言葉を思い出し迎えに行くのを止めて避難したといいます。お父さんは、もし、学校に迎えに行ったら、自分は助からなかったのではと話します。学校は津波で校舎の3階まで水没していました。

３月11日、Ｃさんは学校を出て公衆電話から家に連絡している時、強く長い揺れに襲われました。そのとき、「プレート海溝型の地震だ。津波がくる」と直感し、避難したといいます。なぜそう思えたのか質問したところ、理科で地震発生のメカニズムを学習しました。そして、総合の学習で2004年のスマトラ島沖地震津波を学び、津波を起こすプレート海溝型があることと、その揺れ方の特徴を学習しました。さらに、Ａさんは生徒会のリーダーとして知識を身に付けておかなければと思い自分で調べ、地域の方々に配付する防災のチラシを作成しました。自分で学んでいたから、これはプレート海溝型だ、津波が来るかもしれない、避難しなければと思うことができたといいます。Ａさんから日頃から課題意識を持って自分で学習することが大切だということを教えられました。

東日本大震災から8年が経ちます。震災の後も、岩手県での2016年台風第10号災害、熊本地震、大阪北部地震、西日本豪雨災害、北海道胆振東部地震など、2018年台風21号災害など、全国各地で災害が発生しています。また、今後も、首都直下型地震、南海トラフ大地震などの大規模な災害の発生も懸念されています。

東日本大震災を生き抜いた釜石東中学校の元生徒の皆さんの言葉から紹介させていただきました。彼ら彼女らの言葉を少しでも参考にして、山形中学校の生徒の皆さんの日頃の備えに役立ててもらえば幸いです。

東日本大震災で亡くなられた方は１５，０００人以上、行方不明者は２，５００人以上、負傷者は６，０００人以上と言われています。岩手県だけを見ても、亡くなられた方は４，５００人以上、行方不明者は１，０００人以上、負傷者は２００人以上にのぼっています。

東日本大震災を機に、自然災害に対して、「備える」対策が各地で進んでいます。先日も３０年以内にＭ７～８程度の大地震の危険性を警告する内容の記事が掲載されていました。東北地方に、暫くは大地震はこないという考え方はもたず、常に「備える」準備をしておかなければなりません。皆さんも、ぜひ家族と話し合ってみてください。そして、今日はみんなで考え、祈る日にしましょう。